

国分松本遺跡第12次調査について

平成23年3月19日

太宰府市教育委員会 文化財課 調査係

1 はじめに

調査の対象地は四王寺山の南西裾、標高34mの沖積層上に位置する。西側は奈良時代の筑前国分尼寺の東外郭線に隣接し、対象地の南と東の隣地では尼寺のものとされる礎石が過去に出土している場所に位置する。今回の調査は対象地の東西それぞれに南北に長い調査区を設定することとなった。便宜的に東側を1区、西側を2区としている。

2 第1区の概要



1区では南側に弥生時代のものと考えられる遺物包含層が南側から6mほどの範囲に広がっていたが、それ以北は耕作面が直接遺構に接し、北側は遺構面も消失し黒色粘土の地盤のみとなっていた。ここでは12SB030とした1間以上×2

間以上の弥生時代中期の所産と考えられる掘立柱建物の他、同時期のピット群が南側で集中して検出された。東西溝12SD001もこの時期のものと考えられる。

3 第2区の概要



東側の2区は全般的に近世のものと考えられる耕作土下に一部に平安時代前期の遺物包含層があり、その下に近世と奈良時代の遺構が地山上で確認された。12SX050、055、060は奈良時代の瓦を多く含むたまり状の遺構で、やや西に振れるが南北方向に穿たれている。粘土のある地盤部分は人為的に粘土のみが掘り取られており、粘土採掘を目的として掘られた遺構と考えられる。12SD040は旧河川と考えられ、弥生土器、瓦などが出土している。出土遺物から奈良時代までに埋没したものか。西に隣接する筑前国分尼寺16次で検出した16SD001(奈良時代)に続く遺構と考えられる。2区は全般的に多量の瓦が出土している。

4 弥生時代のようす

弥生時代は西側の2区北側の茶灰色土では甕棺を含む中期の祭祀土器群が出土し、墳墓関連の遺構の存在が想定され、東の1区は掘立柱建物があり集落域に属している。

5 奈良時代のようす



奈良時代については、連続する土坑群が筑前尼寺の東外郭線に併行する形で穿たれた粘土採掘坑であり、造寺や維持管理に関する作事や、造瓦に供する目的で掘られたものと解釈される。これにより古代寺院の外縁部分での土地利用の一樣相が知られることとなった。

試掘調査ではこの粘土採掘遺構のさらに東側（奈良時代の尼寺の反対方向）では南北方向に据えられた土管が発見されており、東西方向の築地などの施設があった可能性もあり、将来的には遺跡の面的な把握が望まれる。



2区の粘土採掘坑から出土した
 鴻臚館式の軒瓦（上が丸瓦、下が平瓦）
 とそれに続く形式の軒丸瓦（右上）
 尼寺の屋根に葺かれていたと思われる。

